

勃興時における蒙古人の太陽崇拝と祖先崇拝について

高 原 武 雄

On the Heliolatry and Ancestor Worship of the Mongols
in their Rising Time

Takeo TAKAHARA

勃興時における蒙古人は、族長から庶民にいたるまで殆ど、最高神である騰格理^{tengeri}の崇拝を中心とする厚いシャマニズム^{shamanism}の信者であった。そしてこの吾人の想像を絶する信仰心の広さと深さは、成吉思の蒙古統一の主要原因の一つとなったのである。（愛知工業大学研究報告第4号，p. 261—65，同5号，p.11—16参照）

又これと同様に当時の蒙古人は、厚く祖先を崇拝し、始祖の説話を大切に伝え氏族の伝統を誇りとしたのであって、これは纏て民族的団結や復讐の精神となつて、蒙古の建国や拡張の動因となつたのであるが、本論では勃興当時（A.D.1150—1250）の蒙古人の太陽崇拝と祖先崇拝の姿を、当時の民俗を語る貴重な史料「元朝秘史」を中心として叙述する。（D.p.2—4，J. 序論，p.16参照）引用の文献は便宜上別紙の通り省略記号を用いる。

I 勃興当時蒙古人の太陽崇拝について

勃興当時の蒙古人の太陽崇拝を窺う史料は少ない。

(a) 不児罕嶽への感謝の祈り

A.D. 1240年に著作せられた「元朝秘史」によると、帖木真が篋兒乞傷に急襲せられ、不児罕嶽に逃がれて危難をまぬがれた後、彼は不児罕嶽を祭って感謝の祈禱を捧げたが、その時彼は太陽に向かって感謝の辞と子子孫々この大恩を忘却せざることを契つたが、その祭について「秘史」は「日を迎へて………日に〔向ひ〕九たび跪きて、灌奠祈禱を捧げたり」と那珂博士は訳している。

(A巻2, p.83) 明訳は「納^舌額^舌額^舌兒^舌古………納^舌額^舌也^舌孫^舌帖^舌莎^舌葛^舌 (暢) 抽^舌 撤^舌出^舌里^舌 幹^舌赤^舌兀^舌里^舌幹^舌克^舌罷^舌 (C巻2, p.

512) としている。

(b) Pian de Carpin の旅行記に見える定宗(貴由)即位式の記録

K, p.22には、A. D. 1246年定宗即位式の模様を次のように載せている。

'Here We remained until the feast of Saint Bartholomew(24th August) when there assembled a great multitude, and they all stood with their faces turned to the south, some of them a stonés throw from others, going ever farther and farther away, making genuflexions towards the south. As for us, not knowing whether they were

making incantations or bending knees to God or what else, we would not make any genuflexions.

(c) Juvainiに見える定宗即位式の記録 (F.p.251-52) 玉座にのぼり群臣が彼に忠誠をちかってから 'after which they went out of the hall and knelt three times to the sun'. とあるが、これによって、D'ohson, H. Howorth は次の如く述べている。「Kuyuk with his ollowers then left the tent and did obeisance to the sun.」(P.p.163, I 下巻p.133)

(d) W.Rubruk の旅行記とその註に見える Peter, Carpin の報告書。

A.D.1253—55年 Mongol に旅行した Rubruk は蒙古人の慣習について次の如く述べている。

K,p.61 には 'If he were to drink seated on a horse, he first before he drinks pours a little on the neck or the mane of the horse.' Then when the attendant has sprinkled toward the four quarters of the world he goes back into the house, …' の註として, The custom of making oblation towards the cardinal Points, the zenith and the nadir, is still adhered to by many Mongols and Tibetans. It is noted by the Russian archbishop Peter In 1245 (Matth. Paris op.cit, iv,388), and Pian de Carpine (622) who says they specially revered and wershipped the sun, the moon, fire, water.

and the earth; in the morning especially they made these libations.”と載せているが、1245年にチベットに旅行したロシアの大司教 Peter も 1253—55年にわたる Carpin の旅行記にも彼等が太陽を崇拜していた事実を報告している。

(e) D'ohsson 蒙古史に見える記録

1824年に出版した I, p. 62 に韃靼人の信仰迷信的慣行として「日月山川諸元をも崇拜せるが、家屋を出で、南方に向けて膝を屈めて太陽を礼拝し、又酒を注ぎて天体諸元に敬意を表せり。」と述べていることは、以上の史料などによったものと思われる。

(f) バンザロフ氏のカザン帝国 大学 学事録に載せている記録

A. D. 1846年の報告であるが、白鳥庫吉訳「シャマニズムの研究」(p. 18—9)において、「蒙古人は神に対するが如く太陽に対して如何なる権力、如何なる感化力を附していたかは詳かでない。但し太陽が自然界に及ぼす力の広大なことは、如何なる時に於いても明瞭である故、すべての民族において太陽は被崇拜物中の高い地位を占めている。勿論蒙古人も他の民族と同一経路を辿って太陽崇拜に達したのである。但し祈祷文中には一切の諸神を呼びながら、太陽をも月をもその中に加えていないのは不思議である。」と述べている。

以上挙げた六箇の史料によって、勃興当時の蒙古人が太陽を崇拜していた事実を知ること出来るし、バンザロフ氏が指摘しているように、被崇拜物中において高い地位を占めていたことも認められるのである。バンザロフ氏が祈祷文中に他の諸神の名を呼んでいるが、太陽と月とをその中に加えていないのは不思議であると述べているが、その謎を解く鍵は、「元朝秘史」に見える孛兒只斤氏族「成吉思汗家」の「光る御子」の始祖説話と「不児嶽に救われた感謝の祭」についての記録ではなからうかと思うのである。

II 仮説 ^{tengeri} 太陽即騰格理である

この大胆なる仮説を提起する史料は孛兒只斤氏族の始祖説話とその解説、^{Borzigin} 不児罕嶽に救われた帖木真の感謝の禱り等である、まず孛兒只斤氏族の始祖説話であるが、これを伝えるものは、「元朝秘史」・「集史」・「元史」・「蒙古源流」・D'ohsson・Howorth 等であるが、最も古かつ根本的な史料は「元朝秘史」の伝えるものである。

史料内容はそれぞれ幾分の相違がある。

(a) 「元朝秘史」の伝える^{Borzigin} 孛兒只斤氏族の始祖説話
(那珂博士訳A巻1, p. 12による)

「そこに阿闍媛なる彼等の母は言へり。「汝等、別朝^{アランヒョ}古^{ベル}訥台^{グヌタイ}、不古訥台なる二人の子よ。我を「この三人の子

を生めり誰の何の子なるか」と疑ひ合ひて噂し合へり。汝等の疑ふも是なり。

夜ごと光る^(a)黄色^(b)の人、房の天窓の戸口の明處より入りて、我が腹を摩りて、その光は我が腹の内に透るなりき。出づるには、日月の光にて、黄狗の如く爬ひて出づるなりき。軽率に何ぞ言ふ、汝等、これにて見れば、明かに彼の(光る人の子)は、^(d)皇天の御子なるぞ。黒き頭の人に比べて何ぞ云ふ、汝等。合木渾合惕(普き君すめらぎ合木渾罕の複称)とならば、民草はそこに覺らんぞ」と云へり。(B, p. 6, C, 巻1, p. 13a-b, D, p. 8, それぞれ訳意はほとんど同じ)。「元朝秘史」の原文をあげると(○印のところのみ)

(a) 超^舌堅^明 失^舌刺^漢 古^人温。 (b) 格^明格^明延 亦^位訥^日 (c) 納^舌闍^日
撒^舌刺^月-因^前 乞^舌里^通-耶^人兒^光 (d) 騰^舌吉^天里^的-因^子 可^兀(惕) 備^者由^也-者^也
とある。その著作は1240年である。

(b) A. D. 1310年 Rashid の著作になる「集史」では、(ロシア語訳 M, p. 11—14参照)「秘史」の伝えるところと相違して、五人の子に教える五本の矢の譬による和合の訓は削除せられているが、「光る人の子の物語」は殆ど一致している。ここに注意すべきことは、この物語について Rashid はイスラム教の唯一神であるアラフ(Allah)の神威を示す奇跡の物語であるとし、^{tengeri} 騰格理の代わりに^{A'lah} アラフをあてていることである。イスラムを信奉する彼としては当然のことであろう。

(c) A. D. 1369—70年宋濂などの編纂になる「元史」は「光る人の子の物語」をのみ載せているが、この光る人を「化爲金色神人」と述べ、五本の矢の譬による和合の訓は載せていない。

(d) A. D. 1662年サナング・チェチュンの著作になる「蒙古源流」は所伝最も「元朝秘史」に近く、五本の矢の譬も載せているが、「光る人」とはせず「奇偉なる一丈夫」とし、「天つ御子」なりとしている点は「秘史」と同様である。(Q巻 3, p. 32—4 参照)

(e) A. D. 1824年著 D'ohsson の蒙古史 (I, p. 67参照)には簡単に光る人の子の物語を載せているが、神の子であるとは述べていない。

(f) A. D. 1876年著 H. Howorth の蒙古史 (p. p. 37)には、Rashid の「集史」によって「光る人の子の物語」を載せているが、神の子であるとは述べていない。しかし Howorth はこの物語について次の如く解説している。

'In reference to this legend, it may be remarked that it is a repetition of the original story of the incarnation of the Buddha Sakiamuni. A simular story is told about the birth of Apaokhi, the

founder of the Liau dynasty, and also of Aishin Giyoro, the reputed founder of the Manchu dynasty, The existence of Alung Goa is attended by so many independent witnesses, that it may perhaps be believed. Rashid tells us that, according to the history of the house of Jingsis Khan, deposited in the imperial treasury (the same MS. elsewhere referred to by Rashid as the Altan Defter, or Golden Register), and according to the evidence of very old men, she probably lived four centuries before his time, 'すなわちこの物語は、釈迦牟尼の生誕物語以来のくりかえしである、遼・清両王朝の始祖説話もこれに類似している。

(感生説話) 王家の宝庫に収められた成吉汗家の物語 Altan Defter とか古老の言によって Alung Goa (阿闌媛) が Rashid の時代から400年前に実在したと述べている。

(g) 内藤湖南博士の感生帝説

以上孛児只斤氏族の始祖説話の諸史料を紹介したのであるが、この説話の由来・本質について最も明快な解明を行なったものは内藤博士である。博士は「東北亜細亜諸国の感生帝説において次の如くのべている。(内藤湖南全集第8巻, p.182—38による)

東北亜細亜諸国、即ち東部蒙古より以東の各民族は、朝鮮・日本へかけて一つの共通せる開国伝説をもっている。すなわち太陽若しくは何か或物の靈氣に感じて、処女が子を産み、それが国の元祖となったという説であって、博士はこれを感生帝説と総称し、蒙古の始祖説も扶餘・高句麗・新羅・百濟の開国説話と系統を同じくする感生帝説話のうち太陽説話に属するものであると指摘しておられることは、まことに卓れた解説である。同、p.186 には、「此の伝説は東方亜細亜に於いて、余程後世まで存在して居ったので、蒙古の伝説にも之が明に現はれて居る。即ち……中略(蒙古の始祖説話)……。此の蒙古種族の最初の居住地は、やはり前の橐離即ちダフルに近い黒竜江の上流、興安嶺を中斷して流れている地方であるから、此の伝説はただに橐離以南の国に存するのみならずして、橐離以北の国にもあると云ふ事が分明する。」と叙べている。

(h) 最高神—騰格理の崇拜

勃興当時の蒙古人は、厚いシャーマニズムの信者であったが、その信仰の中心は騰格理崇拜である。「元朝秘史」の伝えるところによれば、当時蒙古人はこの騰格理という語を少なくとも二様の意味に用いていたのである。すなわち神格者としての天を指すものであるが、一方その

星ある天は廻りてありき。」明訳は「^{hodutai tengeri}豁都台 騰格理_{星有的 天}」
^{degere tengeri munke tengeri}豁兒赤周 不列額」(C巻11, p.24a)の語が見えているので、蒼天の意味にも用いていたのである。又「元朝秘史」には^{degere tengeri}迭額列騰格理、^{munke tengeri}蒙格騰格理の語も多数見えているが、これは迭額列も蒙格も単に「上なる」とか「永遠の」とか「長生の」とかいう意味で、騰格理の修飾語にすぎなかったと思われる。(N, p.162—3参照)

(i) 仮説 太陽は騰格理である。

以上 8 ヶの史料を総合して考えると次次の結論を出すことができる。

(1) ^{Borzigin}孛児只斤氏族の始祖説話は「元朝秘史」に見えるものが年代的に最も古くかつ根本的であること。

(2) そして此の物語の解説は内藤博士の「感生帝説」をもって結論とすべきこと。

(3) 従って内藤博士の太陽説話によって「元朝秘史」の^{Borzigin}孛児只斤氏族「光る人の子」の始祖説話を解説すれば、「光る黄色の人」—超堅 失刺 古温—は「太陽の精である光の化身」ということに解すべきであり、その光る黄色の人の子が「皇子の御子なるぞ」=騰吉里—^{tengeri}因可兀(子)備由者とは、「太陽の精」すなわち騰格理、換言すれば神靈としての太陽はすなわち蒙古人の最高の信仰対象である騰格理である。という大胆ではあるが、仮説が成立するのである。

註、赫々として蒼天に輝く太陽は「元朝秘史」によると、C.1, p.13a に納闐—^{naran}naran—と表現している。

(i) 仮説への補証

この仮説を補証するものは、^{Temuzin merkit}帖木真が^{Purgan}孛児乞傷の難を不見罕嶽に救けられた感謝の祭である。I, (a に示した通り「日を迎へて……日に〔向ひ〕九たび跪きて、^{Purgan}濟蒼祈禱を捧げたり。」(A巻2, p.83)とあるのは、^{tengeri}不見罕嶽の方に向けて感謝の祈を捧げるのが当然のように思えるが、太陽に向けて太陽—^{naran}納闐—に感謝しているのは、最高神である騰格理への感謝と、子々孫々この大恩を忘れませんという感謝の誓約でもあったのである。

(註、A巻2, p.83「不見罕の御嶽を朝ごとに祭れ、日ごとに禱れ。我が子孫の子孫覚え居れ。」) 従ってこの祭りより察せられることは、太陽すなわち騰格理であったと解することが妥当ではなからうか。

(k) 謎への解明

バンザロフ氏が、「祈禱文中には一切の諸神の名を呼びながら、太陽をも月をもその中に加えていないのは不思議である」と述べているのは、勃興当時の蒙古人が最高の神として崇拜した「蒼天の神靈」—^{tengeri}騰格理—は、赫

々と蒼天に輝く太陽一訥闌一と、皓々と夜の天空をわたる月一撒刺一に、その神霊の鎮まりますところ、その光の中にその象徴を認めていたのではなからうかと推量するのである。

III 勃興当時の蒙古人の祖先崇拜

勃興当時の蒙古人の祖先崇拜を物語る史料は太陽崇拜に関するものと同様に少ない。しかしその乏しい史料から出来るだけ正確にその姿を明らかにしたい。

(a) 蒙古の始祖説話

蒙古人は三種の始祖説話をもっていた。その(一)つは蒼い狼一孛兒帖赤那一と惨い牝鹿一窩埃馬喇勒一を始祖とする所謂狼麋交配説話であって「元朝秘史」の伝えるものである。その(二)は阿蘭媛が夫なくして「光の精」をみもごって成吉思の遠祖孛端察兒を生んだとする「光る人の子」の感生帝説話であって、「元朝秘史」・「元史」・「集史」に載せられている。その(三)は蒙古人の祖先が他民族の圧迫をエルグネ・ホン山中に避けたが、人口の増加のため、この洞窟を七十のフイゴで爆発して広い土地に出ることができたとする鍛冶の説話であって、イスラームの史料「集史」が伝えるものである。(E, p. 19—20参照)この(一)と(二)は蒙古人全体の始祖説話である。その(三)は孛兒只斤氏の始祖説話である。

(b) 以上あげた三種の始祖説話のほかに、それぞれの氏族の由来を語る伝説をもっていた。「元朝秘史」は「光る人の子」孛端察兒を祖とする成吉思罕家の聖なる物語であるが、又その中には、衆兒辺姓とか巴喇喇姓とか札答喇姓等々二十数氏族の由来を語る物語が載せられている。今一二の例を挙げると次のようである。「その孕める婦人は、孛端察兒の處に来て子生めり。他人(蒙)の子なりとて札只喇歹と名づけたり。(札只喇歹は、札答喇歹ともいう。あだしの蒙語なる札傷の尾を変じたるにて、あだしきの意なり。蒙古源流には幹濟爾合元史世系表挿只来。)札答喇の遠祖とその(人)は為れり。(A巻 1, p. 20)「ハチンの子にナヤキタイという名のものがあった。役人ぶる癖があったために、ノヤキン姓となった。ハチグの子にバララダイという名のものがあった、大きな図體で大食ひであった。これはバルラス姓となった。(B, p. 14 A巻1, p. 24には同意訳)という風である。註原典である「元朝秘史」(C巻1, p. 27a—27b)は次の通りである。

「合臣一訥 可温 那牙吉歹 捏列合 不列額
 (人(名)的 子 (人)名 名字付的 有 来
 那踏失(黒) 阿不里秃 秃刺 Nojakin oboy
 義官人 性兒有的 上頭 那牙勤 幹李(黒)
 姓(有的)

tan 中 Qaciyu Barulatai
 壇 孛魯罷 合赤兀-因 可温 把魯刺台
 每 做了 (人) 名的 子 姓(兒) 名
 捏列秃 不列額 也客 別額秃 亦迭額捏
 名字有的 有 来 大 身子有的 茶 飯 行
 Barulas
 把魯(黒) 不列額 把魯刺思 幹李(黒) 壇 孛魯
 猛 的 有 来 ……回(名)每 姓(有的)每 做
 罷」 Rashid はこのことについて次のように語っている。

「これらの部族は数が多いにもかかわらず、それぞれの起源についてよく知っているが、これはモンゴル族がアラビヤ人と同じく、その家系の記憶を伝えることに注意し、宗教教義の初歩を数えるのと同じように、子供に習得させるからである。」(S巻1, p. 23), (I上巻, p. 67—8参照)しかし「元朝秘史」では、帖木真合撒兒が、異母兄別克帖兒を射殺したとき母訶額命が子供達を厳しく叱ったとき「その子どもを旧き辞を尋ね、翁等の辞を引き、甚く憂えたり。」(A巻2, p. 56)と結んでいるところと併せて考えると、Rashid が語っているように家系の記憶を伝えることに注意すると共に、「元朝秘史」がその傳を伝えているように、古老の言葉は勿論それぞれの氏族の辛苦に充ちた物語を赤裸々に語り継いだのであろう。何れの民族もその開国の物語をもたないものはない。が(a) (b)の史料から窺いうるものは、当時の蒙古人が共同の始祖説話のみならずそれぞれの部・氏族においても、祖先の由来や苦勞の物語を世代から世代にうけつぎ、祖先の苦心を忘れず父祖の恩恵に報いようと努めたことが偲ばれるのである。この間の消息を物語るものがRashidの「集史」に見える除夜の感謝祭の記事である。「チンギス・カンの後裔であるモンゴル朝の帝王たちはこの事件を追憶して祭典を行なった。すなわち、新年の前夜に、鍛冶屋達は皇帝の面前で灼熱した鉄を鍛え、一同は厳肅に上帝に感謝するのである。

(S第2章, p. 19による, I第2章 p. 65参照)註(この事件とは七十箇のふいごで火勢をあまり鉞坑を熔解させて、通路を開いたという鍛冶の始祖説話中の苦心をさす。)

(c) 主格黎(祭天處)の祭祀
 「元朝秘史」によれば、主格黎は族長の天幕の近くに設けられた祖先の霊を祭る聖域であったと思われる。其処には祖先の血をひくものおよび血縁のもの配偶者でなければここに入りはできなかった。(註1参照)又ここで行なわれた祭は合札魯 亦捏魯(註2参照)と呼ばれ、祖先の霊を祭り祭壇に供えた酢を祭典の後に氏族のもの達が食事する慣習であった。(註3参照)このようにして当時の蒙古人達は共同の祖先の霊を祭り、祖

靈に感謝したのである。

註 1, 「沼咧歹は前に主格黎(明本旁訳以竿懸肉祭天處)に入りたりき(明訳, 李端察兒在時將他做兒祭祀時同祭祀有来)李端察兒無くなれる後, その沼咧歹を「家には常に阿當合兀喰合歹(即ち前の阿當合兀喰合姓)の人住めり。彼のなるぞ」とて祭天所より出して, 沼咧亦傷姓となして, 沼咧亦傷の遠祖とその(人)は為れり。

(A巻1, p.22—23)

註 2 「その春, 俺巴孩合罕の合禿楊幹兒伯・莎合台二女は祖の靈を地に祭り(明旁訳地裏焼飯祭祀)にいでたる時。」(A巻2, p.47) 「焼飯以為祭」と「元史」七十七国俗旧禮中にあり。合札魯中舌亦札魯舌と(C巻2, p.1bに見えている。
加 以 燒飯祭祀)

註 3 「訶額侖兀真往きて, 後れ到りて漏らされて, 訶額侖兀真是幹兒伯・莎合台二女に言へらく「也速該巴阿禿兒を死にたりと云いて, 我が子どもを, 大きくならざるに依り, 御祖の〔御前の〕班列より餘れる供物よりヒモロキ詐より何ぞ脱れさせたる。汝等。見ると, 食ふことを勧めざるに起つこととなれり, 汝等」と云ひき。(A巻2, p.47—8 による。C巻2, p.1b—2a参照)

(d) 豁兒赤来て言はく

「豁兒赤来て言はく……………我等〔の祖〕は札木合〔の祖〕と腹一つの胞漿一つの者なりき, 我等。札木合より離れざるものなりき, 我等。」(A巻 3, p.111による, B, p.75, C巻3, p.37b参照) 祖先を同じくする者が離れ得ざるものであるという心は, 当時の蒙古人の氏族的精神を窺う史料である。

(e) 前の日より塔塔兒の民は

「前の日より塔塔兒の民は, 御祖なる父を失ひたる讎ある民なりき。今この機会に力合はせん, 我等」(A巻4, p.130による, B, p.91—2 参照 訳意同じからず,)

「塔塔兒舌亦兒堅舌額不格思ebug's額赤格昔ecigesi巴剌巴撒揚撒揚
標名 百姓 祖宗 父祖(母)行 了了的(母)

幹失田舌亦兒堅舌不列額不列額(C巻4, p.11b—12a) この成吉思の言葉は, 父祖を殺した塔塔兒部への燃える復讐の心をよく表現している。強い祖先崇拜の心が読みとられる。

(f) アルタン, クチャルに言い遣る言葉

「お前等二人は襪を棄てて, 一 眼のあたり棄てよう。と言ったのか。それとも敵対して棄てようと言ったのか。クチャルよ, お前はネクン・タイシの子ゆえに我々の中から一お前がハンとなれと言ったのだが, ならなかったのだ。アルタンよ! お前の父のクトラ・ハンがモンゴルの民を支配せられたので, 「お前がハンとなれ」と言ったのだが, ならうともしなかったのだ。先輩に, バルタン・バガトルの裔の, サチャとタイチュの二人が居ったが「お前がハンとなれ」と言ったが, ならう

としなかった。それで「お前がハンとなれ」とみんなに言はれて, やむなくハンとなり支配して来たのだ。………ハン推戴の辞あり……………三河(オノン・ケルレン・トゥラ三河)の源には誰にも駐営させるな!」(B, p.156—57による, A巻6, p.233—4C巻6, p.35a—37a 参照) この言葉は王汗に急襲せられ合刺合勒只揚の戦に敗れた成吉思汗が, 同じ氏族のアルタン, クチャルにその背信を責むる悲痛な叫である。親征録には「三河之源, 我祖実興。母令他人居之」と記している。氏族を愛し祖先を崇拜する真情があふれている。

(g) 也遂合敦の建議

「也遂の言は, 善きよりも善し。……………我も先祖〔の大業〕を承継がざるに(承継ぐべき人を定めざるに)忘れて居りき。死ぬことを得られざるに睡りて居りき」

(A巻11, p.463による, B, p.266参照)

この成吉思の語は, 彼が征西の役に旅立つにあたり也遂合敦が嗣子冊立の建議を行なった時のものであるが, 嗣子選定にあたって先主による後継者の名ざしが行なわれていたことを示す史料であると共に, 先祖の大業を承継ぐことがどれほど重大視せられていたかを示す史料でもある。

(h) 我が第1の事業は

「皇考の高位に坐て, 皇考の後に勤みたることは, 我が札忽揚(明旁訳金人毎)の民の處に出征して札忽揚の民を平げたり, 我。」(A巻12, p.661による, Bp., 310) 明訳は「額赤格-余延舌也客舌幹舌突兒舌撒兀周中合罕中額赤格-因父豁亦訥目的行(委)大亦列都克先父……………」(C続集巻2, p.54b—55a)

太宗の四功四過の第1の功業は, 父の後を継いで, 金人を征討して殲滅したことである。

と述べ父祖の意志を継ぐことを功業第1としている。

(i) 朶豁勒忽の殺害

「我が皇考の正主の前に働ける朶豁勒忽を害したるは過てる非違。(今我が前に誰かしか働きてくれん。)……………」(A巻12, p.664による, B, p.311参照)

中額赤格-因父米訥目的因速-安正主目的行額大捏前幹捏木列古同明
中朶豁勒人名忽-宜行客格速列古除害時不魯兀……………」(C続集巻2, p.55b—57a) 朶豁勒忽は何によって殺されたのかわからないが, 父の馬前に働いた功臣の殺害を非違として太宗があげていることは, 亡父を尊崇した証左であろう。

以上9箇の史料によって勃興当時の蒙古人の祖先に対する観念がどのようであったかを述べたのである。例証の数は多くなかったが, 彼等の篤い祖先崇拜心, 厚い氏族意識を窺うに十分であろう。

む す び

この報告は、Ⅰ 勃興当時の蒙古人の太陽崇拜、Ⅱ 仮説太陽即騰格理、Ⅲ 蒙古人の祖先崇拜の三項よりなっているが、第Ⅰ項では乏しい史料ではあるが、勃興当時蒙古人が太陽を崇拜していた事実を立証した。第Ⅱ項においては、孛児只斤氏の始祖説話である「光る人の子の物語」を伝える諸史料のうち、最も根本的な史料が「元朝秘史」の伝えるものであること、この史料の由来を解明するものとして内藤博士の「感生帝説」が信頼すべき結論であることをあげ、この両者の組み合わせによってこの伝説に見える「光」は太陽の光であり、従ってこの光によって生れた子は騰格理の子であるという説話から大胆な仮説「太陽即騰格理」を提起し、バンザロフ氏の謎の解明につとめた。そしてこれを補証するものとして、不見罕の祭に関する史料をあげた。第Ⅲの項においては、勃興当時の蒙古人の祖先崇拜の観念を窺う史料をあげ、篤い祖先崇拜の心について叙べた。ここに注意すべきことは、罕児只斤氏族の「光る人の子の物語」に見える「騰格理の子孫」である思想は、ただ伝説として信ぜられ語り継がれていたのであって、「元朝秘史」の作られた1240年の頃には、成吉思は神の子であるという思想は見つけることができない。

兎も角あつゝ祖先崇拜の観念と強い氏族意識は、蒙古勃興の動因となったのである。成吉思が阿勒壇と忽察児に申し遣った言葉をもってむすびとする。「三河の源は、誰にも勿下當せしめそ」。

引用文献とその略記号

- | | | | | |
|--------------------------------------|---|-----------|----|---|
| 那珂通世著 | 成吉思汗実録 | 1907 | 略号 | A |
| 小林高四郎著 | 蒙古の秘史 | 1941 | 略号 | B |
| 白鳥庫吉訳 | 音訳蒙文元朝秘史 | 1943 | 略号 | C |
| 岩村 忍著 | 元朝秘史 | 1963 | 略号 | D |
| 小林高四郎著 | ジンギスカン | 1960 | 略号 | E |
| J.A.BOYLE 訳註 | JUVAINI 著
THE HISTORY OF THE WORLD-CONQUEROR | 1958 | 略号 | F |
| | 元 史 | 1310 | 略号 | G |
| | 親 征 録 | | 略号 | H |
| C.D' OHSSON 蒙古史 (田中萃一郎訳補 | | 1824 (原著) | 略号 | I |
| | | 1939 | | |
| ウラヂミルツオフ著 | 蒙古社会制度史 | | | |
| 外務省調査部訳 | | 1941 | 略号 | J |
| W.W.ROCKHILL 訳註 | THE JOURNEY OF
WILLIAM OF RUBRUCK TO THE EASTERN
PARTS OF THE WORLD, 1253-55, | | | |
| | | 1900 | 略号 | K |
| 白鳥庫吉訳 | バンザロフ著
シャーマニズムの研究 | 1939 | 略号 | L |
| O.I.SMIRNOVOJ 訳 | Rashid-ad-din, Sbornik
letopisej. Tom I kniga vtoraya | 1952 | 略号 | M |
| 愛知工業大学 | 研究報告 第4号 | 1968 | 略号 | N |
| 愛知工業大学 | 研究報告 第5号 | 1969 | 略号 | O |
| H.HOWORTH, HISTORY
OF THE MONGOLS | | 1876 | 略号 | P |
| 蒙古源流 | 江 実訳註 | 1939 | 略号 | Q |
| 内藤湖南全集 | 第八卷 | 1969 | 略号 | R |
| 佐口 透訳註 | モンゴル帝国史 | 1968 | 略号 | S |